

その頃は覚醒とか新しい生活とかいう文字のまだない時分でした。しかしKが古い自分をさらりと投げ出して、一意に新しい方角へ走り出さなかったのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出すことのできないほど尊い過去があったからです。彼はそのため今日まで生きてきたと言ってもいいくらいなのです。だからKが一直線に愛の目的物に向かって猛進しないといって、決してその愛の生ぬるいことを証拠立てるわけにはゆきません。いくら熾烈な感情が燃えていても、彼はむやみに動けないのです。前後を忘れるほどの衝動が起こる機会を彼に与えない以上、Kはどうしてもちよつと踏みとどまって自分の過去を振り返らなければならなかったのです。そうすると過去が指し示す道を今までどおり歩かなければならなくなるのです。そのうえ彼には現代人の持たない強情と我慢がありました。私はこの双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。

上野から帰った晩は、私にとって比較的安静な夜でした。私はKが部屋へ引き上げた後を追いかけて、彼の机のそばに座り込みました。そうして取りとめもない世間話をわざと彼に仕向けました。彼は迷惑そうでした。私の目には勝利の色が多少輝いていたでしょう、私の声には確かに得意の響きがあったのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手をかざした後、自分の部屋に帰りました。外のことにかけては何をしても彼に及ばなかった私も、そのときだけは恐るるに足りないという自覚を彼に対して持っていたのです。

私は程なく穏やかな眠りに落ちました。しかし突然私の名を呼ぶ声で目を覚ましました。見ると、間のふすまが二尺ばかり開いて、そこにKの黒い影が立っています。そうして彼の部屋には宵のとおりまだ明かりがついているのです。急に世界が変わった私は、少しの間口を利くこともできずに、ぼうつとして、その光景を眺めていました。

そのときKはもう寝たのかと聞きました。Kはいつでも遅くまで起きている男でした。私は黒い影法師のようなKに向かって、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、ただもう寝たか、まだ起きているかと思つて、便所へ行つたついでに聞いてみただけだと答えました。Kはランプの灯を背中に受けているので、彼の顔色や目つきは、全く私には分かりませんでした。けれども彼の声はふだんよりもかえって落ちていていたくらいでした。

Kはやがて開けたふすまをびたりと立て切りました。私の部屋はすぐもとの暗闇に返りました。私はその暗闇より静かな夢を見るべくまた目を閉じました。私はそれぎり何も知りません。しかし翌朝になって、ゆべのことを考えてみると、何だか不思議でした。私はことによると、全てが夢ではないかと思ひました。それで飯を食うとき、Kに聞きました。Kは確かにふすまを開けて私の名を呼んだと言います。なぜそんなことをしたのかと尋ねると、別にはつきりした返事もしません。調子の抜けた頃になって、近頃は熟睡ができるのかとかえって向こうから私に問うのです。私は何だか変に感じました。

その日はちょうど同じ時間に講義の始まる時間割りになっていたので、二人はやがていつしよにうちを出しました。今朝からゆうべのことが気にかかっている私は、途中でまたKを追及しました。けれどもKはやはり私を満足させるような答えをしません。私はあの事件について何か話すつもりではなかったのかと念を押してみました。Kはそうではないと強い調子で言い切りました。昨日上野で「その話はもうやめよう。」と言つたではないかと注意するごとくにも聞こえました。Kはそういう点にかけて鋭い自尊心を持った男

なのです。ふとそこに気のついた私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想し出しました。すると今までまるで気にならなかったその二字が妙な力で私の頭を抑え始めたのです。